

# 自然描写と言語表現

—日本文学の自然描写の「色」を中心に—

千古 利恵子

文学作品では、登場人物の心理や情景描写・場面設定の道具として自然が用いられ、作品の成立時代に関係なく表現には作家の工夫の跡が見える。無論、創作に用いられた言語・ジャンル・読者層・作家の年齢に拠り、表現方法や使用語彙には差異が生じているが、その原因は「言葉」は変化し続けるものであることにある。本稿では、日本文学作品を中心に自然描写の言語表現について考察する。

キーワード：自然描写、色、言語表現、日本文学作品

## 1. はじめに

我が国最初の文学賞である「芥川賞」は、純文学で有るか否かがその選考基準になっている。周知のとおり、1935年の創立以来、選考委員は概ね各時代の文壇あるいは各時代の流行を牽引している作家たちと思える。受賞作品は複数の選考委員により決定されているが、その基準は時代とともに変化することは、現在に至る受賞作品の選考理由から容易に推測できる。

現在、国内外を問わず文学に与えられる賞は多数ある。「芥川賞」受賞作品に限らず、文学作品中の自然の景に着目すると、その表現は時代や作家が自然をどうとらえていたか、その傾向の一端が明らかになる。

## 2. 児童文学作品に描かれた自然

文学作品として評価を得た作品には、ストーリー展開の背景に自然の景を描いているものが少なくない。日本文学史に名を残す作品の中から文章例を抄出し比較すると、各時代の作家たちが自然をどのように表現したのか、その表現の特徴の一端を捉えることができるのではない

だろうか。日本の児童文学作品を例に検証してみる。

なお本稿の各章において、作品の本文で検証の対象にした箇所には波線もしくは二重傍線を付し、筆者の考察に関係する本文は必要に応じて太字に改めた。

### 2-1 芥川龍之介の描く自然

『蜘蛛の糸』は、1918年、鈴木三重吉により創刊された児童向け文芸雑誌『赤い鳥』（創刊号）に発表されたもので、芥川が創作した初めての児童文学作品である。お釈迦様が、極楽の蓮池の傍で主人公・カンダタの地獄脱出劇を見ているという設定で描かれており、冒頭と末尾の文章は、以下に記すように自然の描写は表現が酷似している。

#### 蜘蛛の糸<sup>1)</sup>

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢ふれて居ります。極楽は丁度

朝なのでございましょう。

(中略)

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢ふれて居ります。極楽ももう午に近くなったのでございましょう。

冒頭と末尾の場面は共に極楽の蓮池であるが水の色は表現せずに、蓮の花を「玉のようにまっ白」蕊を「金色」と表現している。蓮池の底は泥が積もり、その濁りのために水中を見ることは出来ないからあえて色の表現を避けたともいえるが、蓮の花の表現に「白」「金色」を用いることで、泥池との比較が成されていると推測する。諸悪が充満する「俗世」と清浄な「極楽」とを対比させて「丁度朝なのでございましょう」と「もう午に近くなったのでございましょう。」と、極めて短い時間の出来事として描いている。その意図は、蓮の開花時間の短さで「人生の短さ」を表現しようとするににあったのだろう。地獄を「ひつそりとした闇」の世界であると、極楽を「遠い遠い天の上」の世界であると設定し、途方もなく離れた両者を結ぶ空間に「美しい銀色の糸」を設けている。この「美しい銀色の糸」を介して主人公・カンダタの言動を描くのである。生前、大泥棒のカンダタは悪行を重ねるが、唯一「蜘蛛を助ける」善行があるという人物設定である。お釈迦様の慈悲の心を解せず我欲から解脱できないカンダタ—その正体こそが「人間」だというのだろう。『蜘蛛の糸』の作中に使われた「白・金色・銀」色は、自然界の描写を通して「人間」の本質を凝視する芥川の姿勢が見えるようである。

高橋龍夫氏は、論考「芥川龍之介『蜘蛛の糸』の世界 - 宮沢賢治『永訣の朝』との関連から

- 」<sup>2)</sup>において、次のように述べる。

この作品世界を支えているものは「蜘蛛の糸」の描写そのものであると言い、さらに、現代は社会生活の中に美的感受性や美的活動の復権が様々に提唱されつつあるが故に、美的領域と人間の生の在り方との関わりを示唆する『蜘蛛の糸』の主旨は、改めて再考されるべきだと思われるのである。

35歳で自死した芥川龍之介は『侏儒の言葉』に「ただ古来の詩人や学者はその金色の瞑想の中にこういう光景を夢みなかった。」と「地上の楽園」を表現し、「花を盛った桜は彼の目には一列の襤褸(ぼろ)のように憂鬱だった。が、彼はその桜に、一江戸以来の向う島の桜にいつか彼自身を見出していた。」と『或阿呆の一生』で「東京」を表現している。「金色の瞑想」と一見賛美しながら「光景を夢みなかった」と否定的態度を記し、「花を盛った桜」と満開の美しい景色を描きながら「襤褸(ぼろ)のように憂鬱だった」と生きることに悩む心情を語るのは、高橋氏が論じる「美的領域と人間の生の在り方との関わりを示唆」に通じるのだろう。

芥川にとって自然描写は、人間である自己の内面表現に不可欠な素材の1つとしていたのであろうし、そこに使われる「色」は内面表現を示唆するための重要な素材であったといえるのだろう。

## 2-2 小川未明の描く自然

「日本のアンデルセン」「日本児童文学の父」と称される小川未明は、動植物を主人公にした作品を数多く書いている。今回考察を試みた2作品は、自然界の様子を背景に主人公である花や魚の心情を描いている作品である。そこに使われている「色」にも注目しつつ、未明の人間観察の姿勢を検証してみる。

**なますとあざみの話<sup>3)</sup>**

春の川は、ゆるやかに流れていました。その面に、日の光はあたって、深く、なみなみとあふれるばかりの、水の世界が、うす青くすきとおって見えるように思われました。この不思議な殿堂の内には、いろいろの魚たちが、おもしろおかしく、ちょうど人間が地上で生活するときのように、棲息していたのであります。なかでも、小さな子供たちは、毎日群をなして、水面へ浮かび、太陽の照らす真下を、縦横に、思いのままに、金色のさざなみを立てて泳いでいました。(中略)

あかあかと水の上をいろどって、夕日は沈みました。水の中は、いっそう、暗く、うるわしいものに思われました。このとき、銀のお盆を流したように、月が照らしたのです。「おまえたちも、あんまり方々を遊び歩かないほうがいいよ。日が暮れると、やっとう安心するのだ。私たちは、今日も無事に幸福に、送ることができたと思うのだよ。」と、魚の親たちは子供たちを見まわしながらいいました。(中略)このとき、ひとり、なまずのおばさんは、穴の中から出て、だれはばかるものもなく、大きな口を開けて、水の中で、盲目になって、まごついている虫どもをのみはじめたのです。(中略)「昼間は、いろいろな魚たちが、わいわいしているの、うるさくてしかたがないが、夜は私の天下だ。」と、なまずのおばさんは、大きな口でばくばくやりながら、へびのようにしなやかな尾をひらひらさして歩いていましたが、そのうちに、すさまじい勢いで、うなつて、体を四苦八苦にもみ、ゆり動かすと、いくたびも水の中で転動しながら、どこかへ姿をかくしてしまいました。

物蔭から、このようすを見ていた魚がありました。その魚たちは、小さな声でささやいたのでした。「まあ、どうしたのでしょうか?」「あのしゅうねん深い、おそろしいおばさんが、あんなに苦しんだのを見たことがない。なんでも、思いがけない敵のために、ひどいけがをしたのですよ。」「それに、ちがいません……。なんという物騒なことでしょう……。」魚たちは、ますます小さくなって、息をひそめてじっとしていました。

川のふちに、あざみがつつましくやかに咲いていました。

終日だれと話をするものもなく咲いていたのです。(中略)あざみは、咲いてから、まだ間のないときでした。ある朝一びきのなまずが、すぐ目の下に、岸のすみにも白い腹を出して苦しんでいるのを見ました。どうしたのだろうか?と、あざみは、だまっていました。しかし、日が明るく、水の面を照らしても、なまずは、おなじところに起き直ったと思うと、いつのまにか、また白い腹を出して仰向いて、もだえていたのです。「どうしたのですか?」と、あざみの花は、ついに呼びかけました。このとき、なまずは、起き直ったところでした。

「ゆうべ、人間にやられたのです。もうすこしで水の上へ引き上げられるところでしたが、やっとう糸を切ってやりました。けれど、針がのどに残っていて苦しうがありません。私は、もう長い間、この川に生きてきましたが、こんどばかりは死ななければなりません。」と、うらめしそうにいいました。

あざみは、よく、なまずを見ますと、なるほど、年をとっていました。小さな魚たちが、気味悪がっているおばさんは、このなまずであるかと、しみじみとながめたのでした。しかし、あざみは、いま、この苦しんでいるなまずにたいして、同情せずにはいられませんでした。「ほんとうに、おいたわしいことでした。私は、この岸に咲いて、あなたのお苦しみなさるのを見るばかりで、どうすることもできません。」といいました。

なまずは、また白い腹を出して倒れたが、やっとう力を出して起き上がった。「私は、人間をうらめしく思います。この深い水底にすんでいる私たちが、どんな悪いことを人間にたいしてしたのでしょうか?」なまずは、そういったことさえやっとうでした。あざみは、なまずのいうことに、耳をかたむけているうちに、人間が、自分を毒々しい、野卑な花だといって、足げにしたことを思い出しました。そのとき、人間は、すみれの花をかわいらしい花だといってほめたのです。「ほんとうに、いつ私たちは、人間にたいして、にくまれるようなことをしたか。すべてが同じ花だのに、なぜ差別をつけなければならぬのか……。」と、あざみは、思ったが、口には出さずに、「あなたのおうらみな

さるのは、もったもです。」といました。あざみは、なまずの苦しみつづけた最後を見守りました。(中略)二、三日たつと、あざみの花は、黒く色が変わってしまった。たまたま飛んできたちょうが、これをながめて、「この花は、病気だろうか?」といて、止まらずに飛び去ってしまったのです。

なやみと、うれいのために、あざみの花は、黒くなってしまうのでした。

都からきた、植物学者が、この川のほとりを歩きました。そして、黒いあざみの花を見つけてびっくりしました。「これは、たいした発見だ。この花に、おれの名でもつけてやろう。」と、喜んで、根もとから、あざみの花を切ってしまった。学者は、その花を帽子にさしました。もっとこのあたりをたずねたら、新しい、不思議な植物が発見されないものでもない、目をさらにして歩いていました。「なにか、新しい発見をして、博士になろう。」と、学者の目は希望に燃えていました。

ちょうどその後へ、昨日のちょうが飛んできて、「あの気の毒な、病気のあざみはどうなったろう。」と、みまったのでした。すると、むざんにも、だれにか、ちぎられてしまっていたので、ちょうは、あわれな花の運命に同情せずにはいられなかったのです。

学者は、都へ帰るため汽車に乗っていました。あざみの花を散らさないようにと、帽子にさしていたが、窓よりかかっているうちに居眠りをしました。花は、もうまったくしおれかかっていたので、風の吹くたびに、汽車の窓から、過ぎる村々へ、散って飛んでゆきました。

原因不明の軽い熱病が、村々へ流行したのは、その後のことです。しかし、日がたつと、いつしかその病気も、あとかたなく消えてしまいました。

この『なまずとあざみの話』は、「不思議な殿堂」と表現する春の川の水中を舞台に「魚・なまず・あざみ・ちょう・学者」を登場させて、各々の言動を通して「人間の生活」や「人間の本性」を描いている。例えば「日が暮れると、

やっと安心するのだ。私たちは、今日も無事に幸福に、送ることができたと思う」と魚の親が子を思う姿を描き、魚の子どもたちが「あのしゅうねん深い、おそろしいおばさん」と思いこんでいたなまずが、釣り針が喉に刺さり四苦八苦する様に「あんなに苦しんだのを見たことがない。」と哀れみを抱いたと読み取れる表現をする。苦しみの果てに絶命する最後を見守るあざみには「人間が、自分を毒々しい、野卑な花だといって、足げにしたことを思い出しました。」と過去の自分を振り返らせる。同時に「人間は、すみれの花をかわいらしい花だといってほめたのです。」と、本質を見ずに外見で判断を下す姿勢をたしなめる。また黒く変色したのは「なやみと、うれいのため」と語り、人間が投げかけた言葉が原因であることを推測させる。「なにか、新しい発見をして、博士になろう。」などと功名心に駆られる学者には「居眠り」でその夢を潰えさせる。

未明は、この作中で「同情せずにはいられませんでした。」という表現を2度使っている。一度は、苦しむなまずを見ているあざみの心境として、もう一度は黒変したあざみを見舞ったが誰かにちぎりとられたことに気付いた蝶の心境を綴るためである。車窓から飛び散った「しおれた黒いあざみの花」には「原因不明の軽い熱病が、村々へ流行した」原因のような立場に立たせながらも「日がたつと、いつしかその病気も、あとかたなく消えてしまいました。」と、短絡的な状況判断を諫めるかのように物語を締めくくる。

『なまずとあざみの話』には「この不思議な殿堂の内には、いろいろの魚たちが、おもしろおかしく、ちょうど人間が地の上で生活するときのように、棲息していたのであります。」という表現があり、次に取り上げる『いろいろな花』の

冒頭には「さまざまの草が、いろいろな運命をもってこの世に生れてきました。それは、ちょうど人間の身の上と変わりがなかったのです。」という表現がある。『なまずとあざみの話』は物語の場面を川の中に、『いろいろな花』の場面は広い野原に設定しているが、前者は「ちょうど人間が・・・」と後者は「ちょうど人間の身の上と・・・」と綴ることで、「社会が抱える問題」や「人間が抱える思い・感情」を読者に直視させようとしたのではないか、という疑問が湧いてくる。この2作品の自然描写を比較してみると、この問いを究明する手掛かりが見つかり、未明の創作意図にふれることができるかもしれない。また、どのような「色」を何に対して、どのような情景に対して使っているかに注目すれば、未明が凝視した人間の本質をに迫るのではないのか、と考えるのである。

#### いろいろな花<sup>4)</sup>

さまざまの草が、いろいろな運命をもってこの世に生まれてきました。それは、ちょうど人間の身の上と変わりがなかったのです。

広い野原の中に、紫色のすみれの花が咲きかけましたときは、まだ山の端に雪が白くかかっていた。春といっても、ほんの名ばかりであって、どこを見ても冬枯のままの景色でありました。

すみれは、小鳥があちらの林の中なかで、さびしそうにないているのをききました。すみれは、おりおり寒い風に吹かれて、小さな体が凍えるようでありましたが、一日一日と、それでも雲の色が、だんだん明るくなって、その雲間からもれる日の光が野の上を暖かそうに照らすのを見ますと、うれしい気持がしました。すみれは、毎朝、太陽が上るころから、日の暮れるころまで、そのいい小鳥のなき声をききました。「どんな鳥だろうか、どうか見たいものだ。」と、すみれは思いました。

けれど、すみれは、ついにその鳥の姿を見ずして、いつしか散る日がきたのであります。そのとき、ちょうどかた

わらに生えていた、ほけの花が咲きかけていました。ほけの花は、すみれが独り言をしてさびしく散ってゆく、はかない影を見たのであります。

ほけの花は、真紅にみごとに咲きました。そして日の光に照らされて、それは美しかったのであります。

ある朝、ほけの枝に、きれいな小鳥が飛んできて、いい声でなきました。そのとき、ほけの花は、その小鳥に向かって、「ああ、なんといい声なんですか。あなたの声に、どんなに、すみれさんは憧れていましたか。どうか一目あなたの姿を見たいものだといっていました、かわいそうに、二日ばかり前にさびしく散ってしまいました。」と、ほけの花は、小鳥に向かっていました。小鳥は、くびをかしげて聞いていましたが、

「それは、私でない。こちょうのことでありませんか。私みたいな醜い姿を見たとして、なんで目を楽しませることがあるもんですか。」と、小鳥は答えた。「こちょうの姿は、そんなにきれいなんですか。あなたの姿よりも、もっときれいなんですか。」と、ほけの花は驚いてきました。「私はいいい声で唄をうたいますが、こちょうは黙っています。そのかわり私よりも幾倍となくきれいなんです。」と、小鳥は答えて、やがてどこにか飛び去ってしまいました。

ほけの花は、そのときから一目こちょうを見たいものだと、その姿に憧れました。けれど、まだ野原の上は寒くて、弱いこちょうは飛んでいませんでした。

ある風の強い日の暮れ方に、そのほけの花は音もなく散って、土に帰らなければなりませんでした。ついに、ほけの花は、こちょうを見ずにしまったのです。

それから、幾日かたつと、野の上は暖かで、そこには、いろいろな花が咲き誇っていました。はねの美しいこちょうは、黄色く炎の燃えるように咲き誇ったたんぼの花の上に止まっていた。

ほかのいろいろの多くの花は、みんなそのたんぼの花をうらやましく思っていたのです。その時分には、いつか小鳥の声をきいて、その姿を見たいといっていたすみれの花も、また、小鳥からこちょうの姿をきいて、一目見たいといっていたほけの花も、朽ちて土となって、まったくそ

の影をとどめなかったのであります。

たんぼほの花は、こちょうと楽しく話をしていました。それは静かな、いい日でありました。たちまち、カッポ、カッポという地に響く音が聞こえました。「なんだろう。」と、たんぼほの花はいいました。「なにか、怖ろしいものが、こちらへやってくるようだ。」と、こちょうはいいました。「どうかこちょうさん、私のそばにいてください。私は怖ろしくてしかたがない。」と、たんぼほの花は震えながらいいました。「私は、こうしてはいられませんよ。」と、こちょうはいつ、花の上から飛びたちました。そのとき、カッポ、カッポの音は近づきました。百姓にひかれて、大きな馬がその路を通ったのです。そして、路傍に咲いているたんぼほの花は馬に踏まれて砕かれてしまいました。

野原の上は静かになりました。あくる日もあくる日もいい天気で、もう馬は通らなかつた。

自然の描写で先ず注目すべきことは、「色」の表現である。各文中の二重傍線を付した「色」を掲出してみる。

なまずとあざみの話	<u>うす青</u> <u>金色のさざなみ</u> <u>銀のお盆</u> <u>白い腹</u> <u>黒いあざみ</u>
いろいろな花	<u>紫色のすみれの花</u> <u>雪が白く</u> <u>黄色く炎の燃えるように</u> <u>咲き誇ったたんぼほの花</u> <u>ぼけの花は、真紅</u>

2作品に登場する「魚」「こちょう」「小鳥」「馬」には、色の表現がない。ところが、登場する花には色の説明がある。「すみれ」は「紫色」、「たんぼほ」は「黄色」、「ぼけ」は「真紅」というように、いずれもその最も美しい状態を色で表現している。「あざみ」の場合は、咲き始めは「つつまじやかに咲いていました。」と書くだけで色の説明は無いが、時間が経つと「黒」が加えられる。「黒」は、最期が近いことを暗示する表現に必要な色であったのかもしれない。「あざみ」

は「黒い」が故に拒絶され、「黒い」が故に評価される。だが、車窓から飛び散った花が「黒い」ばかりに、流行病の原因のように思われたと一先ず描くものの、「日がたつと、いつしかその病気も、あとかたなく消えてしまいました。」と、物語をまとめる。「黄色」に咲き誇る「たんぼほ」も、「馬に踏まれて砕かれてしまった」と、その最期を描き、「野原の上は静かになりました。あくる日もあくる日もいい天気で、もう馬は通らなかつた。」と物語を締めくくる。このように、両作品には、自然界の総ての生命体には、最盛期と終末期が必ずあることが描かれている。様々な事象の変化は避けようがないが、やがては穏やかな状況が必ず訪れるという主張である。

未明が描きたかったことを明らかにすることは、以上の2作品の比較だけではできない。しかし、未明にとって、自然界の「色」を描くことが人間社会や人間自身が抱える問題を提示するためには必要であった、とはいえそうだ。「命あるものは総て滅びる」と捉える未明の創作姿勢は、高橋幸平氏が「主観性をその内部に含み、象徴主義へと向かおうとする自然主義の文脈において、未明を評価していたことを明らかにした」とする論考<sup>5)</sup>によっても背けるだろう。

未明は、プロレタリア文学の創作から児童文学の創作へと転向した作家である。『なまずとあざみの話』『いろいろな花』の作品は、まさに「人間の性と社会の矛盾」を直視したプロレタリア文学作家の視点が覗くとはいえそうだ。無論、自然の事象を描くことで未明がその時代を生きる人々に伝えようとしたことを探るには、他の作中から『なまずとあざみの話』『いろいろな花』に登場する「色」と同色の自然描写を掲出し、その表現に込めた想いを探る必要があると考える。それは稿を改めて行うとしても、『なまずと

あざみの話』『いろいろな花』の両作品における「色」の表現は「人間の生活」「人間の運命」を自然界の事象を描きながら、未明自身が「人間としての生き方」に苦悩する姿の象徴のように感じるのである。なぜなら、小鳥に「醜い姿の自分は人を楽しませない」と言わせ、ほけの花には「すみれが孤独にはかなく散る姿を見せ、あこがれのこちょうに会えず一生を終えさせ」ているからである。

### 3. 散文の作品に描かれた自然

日本語で書かれた作品であっても、成立時代が異なると作家が創作に用いた語彙や文法は異なる。何より「自然」それ自体が変化し続けるのであるから、作家の自然観照眼は異なり、作中の表現方法にも違いがあると考えられる必要がある。そこで本章では、日本の古典文学作品の1つで、絵本の原典ともいわれる『竹取物語』における自然の表現に注目してみる。

『竹取物語』には多くの自然描写がある。物語は「いまは昔、竹取の翁といふもの有りけり。」で始まり「もと光竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光たり。」とかぐや姫を発見する竹藪の描写から、かぐや姫の成長、皇子たちの求婚、月世界への帰還と話は展開する。物語は多様な自然描写と共に綴られているのである。本章では、かぐや姫に求婚した一人の「くらもちの皇子」とかぐや姫が難問を提示しその解決に苦戦する様子を描いた「蓬萊の玉の枝」の描写を例に、検証を試みる。紙数の都合上、次に掲出するのは『蜘蛛の糸』『なまずとあざみの話』『いろいろな花』に共通する色が登場する箇所である。

#### 竹取物語<sup>6)</sup> 二、貴公子たちの求婚

(前略) かぐや姫「石つくりの皇子には、佛の御石の鉢といふものあり。それをとりてたまへ」といふ。「くらも

ちの皇子には、東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに銀を根とし、金を莖とし、白き玉を實として立てる木あり。それ一枝おりて給はらん」といふ。(中略)

翁「かたき事どもにこそあなれ。この國にある物にもあらず。かくかたき事をば、いかに申さむ。」と言ふ。かぐや姫、「何かかたからん」と言へば、翁、「とまれかくまれ申さむ」とて、出でて、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」と言へば、御こ達、上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩きそとやはのたまはぬ」と言ひて、うんじて皆歸りぬ。

#### 四、蓬萊の玉の枝（くらもちの皇子の話）

(前略) 海の上にただよへる山、いと大きにてあり。その山のさま、高くうるはし。これやわが求むる山ならんと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしまぐらして、二三日ばかり見ありくに、天人の装ひしたる女、山の中より出でて来て、銀のかなまりを持ちて、水を汲みありく。これを見て、舟より下りて、「山の名を何とか申す。」と問ふ。女答へていはく、「これは蓬萊の山なり」と答ふ。これを聞くに、うれしき事かぎりなし。この女、「かくのたまふは誰ぞ」と問ふ。「わが名はうかんるり」と言ひて、ふと山の中に入りぬ。その山見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらを巡れば、世中になき花の木どもたたり。黄金・銀・瑠璃色の水、山より流れ出でたり。それには色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照りかゝやく木どもたたり。その中に、このとりてまうできたりしは、いと悪かりしかども、「の給ひしに違はましかば」と、この花をおりてまうできたるなり。(中略) かぐや姫の、暮るゝまゝに思ひわびつる心地、わづらひさかへて、翁を呼びとりて言ふやう、「まことに蓬萊の木かこそ思ひつれ。かくあさましき空ごとにてありければ、はやとく返し給へ」と言へば、翁答ふ、「さだかに作らせたる物と聞きつれば、返さむこといとやすし」とうなづきをりけり。かぐや姫の心ゆきはてゝ、ありつる歌の返し、

まことかと聞きて見つれば言のはを

飾れる玉の枝にぞありける

と言ひて、玉の枝も返しつ。(以下略)

かぐや姫がくらもちの皇子に求めたものは、「蓬莱山に生える木の枝」である。蓬莱山は、中国古代（前5～前3世紀）における想像上の三神山（蓬莱、方丈、瀛洲）の1つで、燕、斉の国の神仙術を行う方士によって説かれた神仙境の一つである。かぐや姫は、その山に有る「銀を根とし、金を莖とし、白き玉を實として立てる木」の一枝を所望したと、物語には綴られている。『蜘蛛の糸』の舞台と同様に、架空の自然界であるから、当然、木の表現も非現実的でないといけない。くらもちの皇子が語る冒険談には、天人の装いをした女性が「銀のかなまりを持ちて、水を汲みありく。」と語り、皇子が目にした山は「世中になき花の木どもたてり。黄金・銀・瑠璃色の水、山より流れ出でたり。それには色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照りか、やく木どもたてり。」とその光景を描いている。「金・銀・白・瑠璃」の色を用い、その地が様々な「玉」即ち宝石で作られた自然界であると表現している。

この段は、「皇子はついたその嘘が発覚し、かぐや姫に拒絶されただけでは済まず、一生の恥をかいたとして深山に入り、消息不明になった」と後日談を記した上で、この事件が「正気を失ってぼんやりする」意の「たまさかる（魂離る）」の語源であると述べ、話を締めくくる。

日本古典文学大系本の『竹取物語』解説で、阪倉篤義氏は次のように述べる。<sup>7)</sup>

この竹取の翁の物語は、「古物語」として、また「物語の出で来はじめの祖」として、特に人々に尊敬されるほどのものであったようだ。ただし、物語というものは、みぎ三宝絵詞序文の立場でいえば、つまりは「物いはぬ物に物いはせ、なさけなき物になさけを付け」、あるいは「男女などに寄せつゝ花や蝶やといふ」ような、はかないものなのであ

た。竹取物語は、そういう物語類と必ずしも同一視されるべきものではなかったであろうけれども、しかし要するに一つの慰みであり、「女の御心をやる物」に過ぎなかったことを、思わなければならない。

阪倉氏は、さらに解説の中で、成立・作者共に不明であるとしながら、男性に拠る作品であり、この物語は説話文学群がもと有していた信仰の要素を失いつつも、表現としての「語りの様式」の中に保持し続けた神秘感を受け続けているのだと述べる。同氏は『竹取物語』には「神秘性」が内蔵されていると考察されるのである。

想像上の自然界は、まさに神秘の世界である。そこに存在する事物もまた架空の要素を有しなければならないのであるから、それらの表現に使われる色は、現実色を付してはならなかったのだ、と推定するのは容易といえよう。

芥川龍之介も小川未明も『竹取物語』の作者もその作品の創作時代は異なるが、非現実世界である仮想空間の物語作者たちは、自然描写の色の選択には緻密な計算をしていたに違いない。色の表現こそが、創作者の真意を提示する文脈と密接な関係している、と考えるからである。

#### 4. 韻文の作品に描かれた自然

韻文に登場する自然は、例えば『竹取物語』のような散文における自然が担う役割とは異なるようだ。散文では、主文に付加されてその主張を補強するようだが、韻文では自然自体が主人公となる場合がありそうだ。詩・短歌の中から数例を挙げ、作家の使用語彙と表現上の工夫を捉えたい。

##### 4-1 北原白秋が描く自然

明治から昭和前期に活躍した北原白秋は、「パ



ンの会」をおこし、耽美主義運動を推進した人物である。「赤い鳥小鳥」「待ちぼうけ」などの童謡や「城ヶ島の雨」「ちゃつきり節」などの歌謡の作品も残している。考察を試みる「葱の畑」は詩集『東京景物詩及其他』（大正二 [1913] 年刊）に収録されている。紙数の都合上、改行箇所には「／」を付して掲出した。

**葱の畑<sup>8)</sup>**

寥しい霊が鳴いて居る。／そここの湿つた黒い土のなかで／昼の虫が／幽かな、銀の調子で鳴いてゐる。／疲れた日光が／五時半ごろの重い空気と、／湯屋の曇硝とに、／黄色く濡れて反射し、／新しい臭のなかに弱つてゆく。／寂しい霊が鳴いてゐる。／毛なみのいい樺と白の犬が／交んだまま葱のなかにかくれてる。／眩しさうに首だけ覗いて／淀んだ瞳に／何物をか恐れてゐる。——／息がしづかに茎の尖頭を顛はす。／何処かで百舌が鳴きしきる。／疲れた、それでも放縦ままな／三十過ぎた病身の女らしい、／湯屋の硝子戸を出ると直ぐ／石鹸のほひする身体をかがめて／嬰兒に小便をさして。／寥しい霊が鳴いてゐる。……／母の眼と嬰兒の眼が／一様に白い犬の耳に注がれる。／可愛いいちんぼから小便が出る。／その尿と、濡れた西洋手拭と、束髪と、／無意味な眼つきと、白っぽい葱の青みに、／しみじみと黄色な光がうつる。／しだいに反射がうすれて／外光が青みを帯た。／煙突から薄い煙がたなびき／畑々の葱の尖頭には／銀色の露が光つてくる。／そしてなほ、湿つた黒い土のなかでは／寥しい虫が、／幽かな昼の調子で鳴いてゐる。／寂しい寂しい寂しい畑。

「葱の畑」には、以下の通り色を用いた表現がある。

黒（湿つた土）
銀色（昼の虫の声の調子）
黄色（濡れて反射する疲れた日光）
樺・白（犬の毛）白っぽい青み（葱）
青み（外光） 銀色（露）

湿つた土を「黒」、2匹の犬の毛を「樺」「白」と、実存する色で記すのは平凡である。露を「白」や「銀」の色で表現するのは、古代から定着した用法である。だが昼間に鳴く虫の声を「幽かな、銀の調子で鳴いてゐる。」と形容し、五時半ごろの陽光を「疲れた日光」と捉え、その光が「重い空気と、湯屋の曇硝」に濡れて「黄色く反射」して、かつ「新しい臭のなかに弱つてゆく。」と表現している。虫の声を「銀色」とするのは、感覚的な表現だといえる。五時半ごろになると、陽光は確かに「黄色」を帯びてくるだろうから、ここで表現が完結するなら、白秋の独自性は感じられないといえる。だがその日光を「反射する」「臭いのなかに弱つてゆく」と、さらに「青みを帯びた」外光が変化する様子を表現している。仮に短時間であろうと、自然は常に時間とともに変化し続けることを捉えたこの表現には、白秋の工夫と表現の特徴が感じられるのである。

この詩は「寥しい霊が鳴いて居る。」で始め「寂しい寂しい寂しい畑。」で完結する。各聯の間には「寂しい霊が鳴いてゐる。」「寥しい霊が鳴いて居る。」というフレーズがある。同音の「さびしいたましいがないている」で綴るが、その表記は若干異なる。ひっそりと静かなさまを示す「寂しい」と空虚さを伴う「寥しい」とを使い分け、最後のフレーズには「寂しい」と表記する。詩中の漢字・仮名・カタカナなどの使い分け、改行の設定などは、作品に込められた創作意図と関わりとされる。2つの異なる「さびしい」の表記にも、白秋の主張が込められているということになる。

『東京景物詩及其他』には「金と青とも」と題する4行詩も収録されている。

金と青との愁夜曲、／春と夏との二声楽、  
わかい東京に江戸の唄、／陰影と光のわが  
こころ。

「葱の畑」は明治43年1月に、「金と青とも」は同年7月の作である。横木徳久氏は「白秋が描いた東京は、(中略)異なるものが織りなすハーモニーである。しかし明治の現実はそのを軌轢や矛盾でしか提供しえなかった。」と述べた上で、『東京景物詩及其他』が先駆的な都市文学であると評している。<sup>9)</sup>この横木氏の評から、白秋の創作ジャンルは詩・短歌・童謡など多様であったように、制作の姿勢がその時代の変化に応じた表現を用いていたともいえるのではないだろうか。従って、作中に登場する自然界の色も、白秋独自の表現方法だといえそうだ。

#### 4-2 短歌に描かれた自然

短歌は心情や自然を31文字で綴ることから、詩よりも表現上の工夫が必要であるといえる。掛詞・序詞・枕詞・縁語など伝統的な表現技法を用いながらも、作家たち一特に、専門歌人といわれる多くの歌人—は、自身の独自性を発揮し専門家としての評価を維持するためにも、語彙の選択や表現のための言葉の接続などに苦心している。平安時代末期から鎌倉時代初期に活躍し、歌道家の当主として名を残す藤原定家は、自らを「歌詠みにあらず、歌作り也」と称するように、表現技術の向上に取り組みながら多くの作品(短歌)を創作しているのである。前述の芥川龍之介・小川未明・北原白秋の作中に登場した「黄」「白」「銀」「金」などは、短歌の自然描写に頻繁に使用される色である。そこで、藤原定家が詠じた「白」の表現を『定家卿百番自歌合』<sup>10)</sup>から掲出し、検証してみる。なお、この歌集では、掲出した歌が他のいずれの歌合で

詠じられた作であるかを明記しているが、今回の考察には必要ないため、省略した。

秋 廿九番  
左  
ア、高砂の尾上の鹿の声たてし  
風よりかはる月の影かな  
右 勝  
イ、露さえて寝ぬ夜の月やつもる覧  
あらぬ浅茅の今朝の色哉

冬 五十番  
左 勝  
ウ、お泊瀬や峰のときは木吹しほり  
嵐にくもる雪の山本  
右  
エ、白妙にたなびく雲を吹ませて  
雪にあまぎる峰の松風

アは「鹿の声が風を立てて、その風につれて月光が変化し、その輝きを増している」と詠じた歌で、イは「冷たく冴えた露の上に月光が積もっている。今朝の庭の浅茅の色は目を疑うほどに変化している」と詠じた歌である。秋の景を描いた両首には、ともに月光が登場するがその色を具体的に表現してはいない。

アは、現実には起こり得ない「月光が吹く風に拠って変化する」情景を、まさに感覚的に表現している。イは、「チガヤの上に置いた露に映る月光でチガヤの色がいつもと異なる」と、現実には比較不可能な色の違いを、アと同様に感覚的に表現しているのである。

ウは、「嵐が泊瀬山の常緑樹をたわませて吹くために、雪の降る山のふもとは曇って見える」と詠じた歌で、エは、「峰の松を吹く風は、たなびく雲を雪と交ぜて吹くので、空一面に雪が霧のようにかかっている」と、冬の雪の景を詠じている。両首ともに常緑樹・雪・風が登場するが、

具体的な色を示す言葉は無い。雪や雲の色は「白」と受け止めるのが一般的である。常緑樹や松の色には「緑」を当てはめて想像し、その光景を鑑賞するはずだ。しかし、その樹木に吹く風の色は鑑賞者のイメージに委ねられ、「降る雪で曇っている山のふもとの色」や「雪が霧のようにかかる空の色」もまた、鑑賞者の想像に任せられるのである。

つまり、31文字で創作する作品では、色を具体的に表現することよりも、選択した語句から想像される光景がどのようなものになるか、その光景はどのような色を帯びてくるのか、ということが重要になるのである。

定家に限らず、専門歌人と称される創作者たちは、自身が用いた「色」のイメージが他者の持つそのイメージをどのように覆そうかという考えが強かったようだ。今回掲出した2組・4首では、イ「露さえて」ウ「お泊瀬や」の詠に「勝」の評価が付されてる。『定家卿百番自歌合』の作品評価者は、創作者の定家自身である。従って、31文字における「色」の表現は、イ・ウの2首がア・エより勝ると、定家自らが評価を下したことになる。

本章では、同じ韻文作品でも詩と短歌では、自然界の色を表現する方法には違いがあることが確認できた。その違いは、韻文作品の創作者が獲得している「色」のイメージから生じているとも、表現技法の工夫から生じたともいえるだろう。いずれにしても、韻文作品からは、使用する「色」の固定観念を抜きたいという創作者の思いが、表現の工夫に繋がっていたように考えるのである。

現代に至るまで、人間の生活は自然界の中で営まれており、そこに存在する総てのものに「色」が有る。関心を持った1つの「色」を表現するにも、人間は自身が獲得している語彙の使

い方に工夫を凝らしていたことが、文学作品の文章から想像できる。「色」は無数に存在するが「色」を表現する語には限界がある。ところが言語を用いた表現となれば、それは無限大だということは一詩や短歌にその傾向が大きいとしても一散文・韻文の別なく文学作品に登場する「黄・白・紫・黒」の表現からも明らかである。従って、「色」の検証は、その表現が創作者に委ねられていることから、作家を限定して行うことが必要になるのだろう。

## 5. まとめ

近年、認知学の分野や言語学の分野で、「色」の認知やイメージに関する研究が成されている。「色」のイメージや認知は、人間共通のものかといえば、決してそうではない。雪・雲など具体的な物との繋がりを持つ人もいれば、純粹・清潔・無など抽象的な要素との繋がりを持つ人もいる。「白」は実体として存在しないという科学的分析に囚われないとしても、「白」のイメージや認知は無限であるという認識が、文学作品に登場する「白」の表現検証には、重要になるに違いない。

藤井禎和氏は、文学研究における「作品とテキストという二項対立」について論述し、テキスト（文章）の考察が研究の「新しい視野の可能性」である、と結論付ける。<sup>11)</sup> 伊藤直哉氏は、ICTを活用すると「色の語彙を検索の結果として切り出すだけではなく、コンテキストまで含めた文を切り出せば、実際の作品で使われているイメージとテキストの関係が解き明かされる。」と述べる。<sup>12)</sup>

文学作品には時代を問わず、「色」を用いた文章が綴られていること、「色」の認識が個々の感性に左右されることは、本稿で扱った芥川・未明・白秋・定家の表現からも肯けるだろう。ま

た「色」の選択・表現方法は創作者の意図と密接に関わることも、僅かながら明らかにできた。しかし、自然描写に込めた創作者の意図は、コンテキストまでを含めた文例の言語表現を比較し、検証することが重要になるといえるのである。

注

- 1) 「芥川龍之介全集2」筑摩書房、1996
- 2) 『人文科教育研究』(24)、p.23、1997
- 3) 「定本小川未明童話全集6」講談社、1977
- 4) 「定本小川未明童話全集2」講談社、1976
- 5) 高橋幸平「小川未明と象徴主義—「扉」の中で起こったこと」『光華女子大学研究紀要』(48)、2010、
- 6) 「日本古典文学大系9」岩波書店、1982
- 7) (6) pp.5～7 参照
- 8) 「白秋全集3」岩波書店、1985
- 9) 『北原白秋詩集』ハルキ文庫、2010
- 10) 「新日本古典文学大系46『中世和歌集 鎌倉篇』」岩波書店、1994
- 11) 『物語の方法』pp.165～167、桜風社、1992
- 12) 土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『現代文学論』p.250、

新曜社、2001

参考文献

- ・岡本光加里、霜と白菊の和歌、東京大学国文学論集16、2021
- ・山平千鶴、太宰治作品における色彩語の研究、大阪教育大学「修士論文」、2014
- ・高橋美佐子、日本語の色彩感覚—スーパー戦隊シリーズを中心に—、日本文学ノート 第50号、2015
- ・本廣陽子、うつほ物語と源氏物語—自然の描写を通して—、自然の描写学論叢(24)、2010
- ・三宅義信、国木田独歩の自然描写、近代文学試論3号、1967
- ・稲浪正充・栗山智子・安部美恵子、色彩と感情について(3)、島根大学教育学部紀要 第28巻、1994
- ・山口さずか、色彩に関する言語研究、東京女子大学言語文化研究18、2009
- ・森田克己、色彩とイメージの共感覚現象に関する一考察—、国学研究32巻3号、1998
- ・坂本真樹・内海彰、色彩形容詞と名詞の相互作用による色彩形容詞メタファーの認知効果、認知科学14(3)、2007
- ・吉岡幸雄、日本人の愛した色、2011、新潮社